

研修報告書No. 1 8

所 属：三豊総合病院

氏 名：2年目研修医 松浦 宏樹

研修先：特定医療法人長生会大井田病院

私の地域医療研修

2015年5月7日より高知県宿毛市の長生会 大井田病院にて2週間の地域医療研修に臨みました。大井田病院をはじめ高知医療再生機構など関係者の皆様方のご厚意により、数多くの貴重な経験をさせていただきました。この場をお借りして厚く御礼申し上げます。

高知県を訪れる前の、私の中の高知県や宿毛市のイメージは「南海地震と津波」「荒木 初子 保健師」「新鮮な鰹のたたき」といった何とも脈絡のないものでしかありませんでした。実際に高知県を訪れてみて生活をしてみると、医療に限らず言葉や食事、風習に至るまで多くの差異を感じ、戸惑うこともありました。訪問診療や通所リハビリ施設の見学を通して感じたのはひとえに「地域医療」といっても、その地域毎に求められるニーズは非常に多岐にわたり、地域毎に必要な対応は異なることを印象付けられました。具体的には山間など内陸部での訪問診療や医療計画は離島医療のそれと大きく異なりますが、限られた医療資源および人材を有効に機能させるためにはマクロな視点で捉えられがちな「地域医療」という概念に対してミクロの視点からのアプローチを必要とするため、医療従事者、特に「医師」は目の前の診療に携わるだけでなく、地域においてその両者を結ぶ役割を果たさなければなりません。地域医療に従事する医師の役割と責任感の大きさを肌で感じる事が出来たのは、非常に有意義な出来事でした。

院内における研修では軽微な外傷に対する治療から腎盂腎炎などの内科的疾患、特に結核を疑い実際に診断した症例など、数少ない医療機器と身体所見を駆使して実際に診療にあたり1年間の初期研修で学んだ多くを存分に発揮できました。このように自身の成長を目に見える形で実感出来たのは素直に喜ばしいことでした。そして、同時に普段の診療でCTやMRIが完備された病院にいたということが如何に恵まれているかをあらためて痛感しました。また訪問診療では患者との距離感、家族だけでなく地域一丸となった対応について多くを学びました。そして近年機器の進歩により聴診器と血圧計だけでなく、携行超音波画像診断装置を用いて患者の状態を把握することが可能となり、訪問診療も大きく変わりつつあることを目の当たりにして、訪問診療に対する固定観念が解消されたように感じます。他にも一部の施設では電子カルテが導入されておらず、大学在学中から見たこともない紙カルテの記載方法がわからず、四苦八苦したことも良い思い出です。

さて上述した3つのイメージに関連して、研修中にであった出来事について記載します。まず将来予測される「南海地震と津波」に関して述べますと、研修期間中に自身の中で常に意識していたのは、今この瞬間に地震と津波が襲ってきたとき、どのように行動するかということでした。実際に大井田病院周辺から大島に至るまでを自転車で行き、町内に掲

げられている避難誘導表示の多さに驚かされました。物珍しそうに写真を撮影していたところ80代と思われる女性住民の方に声をかけられたので、災害時の避難について尋ねてみると「津波がくるときはここをあがっていく、訓練もあるし周辺の人には東北の地震の後にどこを通るか、意識して生活している」と返答されました。私の生活する香川県は災害が少なく、特に津波に関する意識は非常に低いと言わざるをえないため、高齢者に至るまで災害に対する共通の認識と知識が周知されていることは大変新鮮な出来事でした。先の東日本大震災では自然の脅威をあらためて認識させられましたが、一方で「想定外」という言葉が跋扈し、災害対応という面で多くの教訓が残されました。特に香川県民の自然災害に対する認識が希薄である点は前述しましたが、香川県内の医療従事者もまた例外ではありません。災害が少ないからこそ啓蒙活動を常に実施し災害への対応を万全にする必要があることに加え、被災地に対して医療物資や人的資源の供給、後方支援を行うハブ港としての役割を担う可能性があることを意識する必要があると感じましたが、現状ではその認識が広く浸透しているとは言い難い状況です。迅速なトリアージ、外傷に対する処置、専門化が進んだ現在の医療の実情を鑑みるに、災害時にはこのような医療情勢と大きく乖離した状況が想定され、これらに円滑に対応するためにも初期研修医として、医療従事者として学ばなければならないことは多く、災害医療に対する自身の認識を根本的に変えられる素晴らしい経験となりました。このように院内における研修だけでなく、地域住民との関わりも含めて、院外で学ぶことの本当に多い研修であり大変有意義な時間を過ごすことが出来ました。

以前同じ大学の看護科学生で保健師を目指している後輩から、絶海の孤島でフィラリア症の撲滅に尽力された保健師 荒木初子女史について話を聞く機会がありました。保健師として島内の医療情勢に劇的な変化をもたらした功績について、目を輝かして語る後輩の姿が印象的であり、公衆衛生学の重要性に気づかされたことを覚えています。近年では社会科の教科書にも記載されており、図らずも映画の舞台となった沖の島を訪れる機会を得られたことは私の地域医療研修のハイライトといっても過言ではなく、壮大に広がる大海原と澄み渡った青空の下、限りない青色に染まる孤島の中で究極の予防医療と地域医療を過酷な環境で体現された荒木女史と同じ景色に立ち、背筋を正される思いがしました。

最後に「新鮮な鯉のたたき」を含めた食事など余暇について記載いたします。休日には足摺岬や四万十川を案内していただきました。ダイビングの聖地「柏島」には天候が恵まれず、訪れることはかないませんでしたが、四万十川をサイクリングで60km程走り、カワセミが佇む川沿いの景色、「最後の清流」に相応しい美しい自然に心が洗われるようでした。そして海産物の味は形容する言葉が見付からず、特産品であるゴマサバの刺身、サバ寿司の味は一生忘れられません。

とりとめのない文章となりましたが言葉で書き表せないほど貴重な体験を本当に数多くさせていただきました。私にとって今回の地域研修は間違いなく大きな財産になるでしょう。スタンフォード大学の卒業式で祝辞を述べた故スティーブ・ジョブズ氏が残した言葉

に「点をつなげよ」という一節があります。経験した「点」をすぐに「線」にすることは誰にもできないが、経験を振り返ったときに「点」を繋げて未来への「線」とし先を切り拓いていくという解釈で私は捉えています。今回経験した様々な貴重な経験は私の初期研修医、そして医師としてのキャリアにおける間違いなく大きな「点」になりました。今後医師として成長していくうえで今回の経験を存分に生かし、「点」を一つ一つ繋ぎ、どのような形となるかはわかりませんが未来に確固たる「線」を結ぶことを目標とし努力して参ります。本当にありがとうございました。